

エリーザベト・ルーカス〔著〕

草野智洋・徳永繁子〔訳〕

ロゴセラピー

——人間への限らない畏敬に基づく心理療法

A5判並製・新教出版社

2024年8月刊

定価3,300円（税込）

評者＝上野永子（静岡福祉大学）



本書は、『夜と霧』（みすず書房）で有名な Viktor Frankl に師事し、Frankl が創始したロゴセラピーの理論化と普及に大きな貢献した Elisabeth Lukas による “Lehrbuch der Logotherapie : Menschenbild und Methoden” の全訳である。私が（勝手に）「魂の友」と呼ぶロゴセラピストの草野氏が、この翻訳に取りかかり始めた頃、本書のドイツ語の文法構造の複雑さに対して「ほんま、あほちゃうかと思えますよ」（この文脈におけるこの発言は「どうしてこんなに難しいのだ」の意と理解することができる）と言っていたのをよく覚えている。その後、この「あほちゃうか」という作業を続けて、出版に至ったことそのものに、当時、「魂の友」が人生における困難に遭遇していたことを知る者として、畏敬の念を禁じ得ない。「やっぱり、ロゴセラピー的態度を貫いて、訳し続けてたのかな？」と、そんな思いで、本書を読んでみた。

本書は、第1部「ロゴセラピーの人間像」、第2部「ロゴセラピーの会話形態」、第3部「ロゴセラピーの技法」、第4部「ロゴセラピーの応用」によって構成されており、ロゴセラピーに至る Frankl の考えから、実際の臨床実践までを知ることができる。第2部と第3部では、具体的なロゴセラピーの介入方法について事例を交えて、初学者でもわかりやすい内容で記述されている。そのなかに、事故で運動機能の多くが失われ、絶望し、理不尽な恨みを抱き、死を望んでいた若い男性の事例が紹介されている。この男性に対して、Lukas 氏は、当初は男性の攻撃的な不満を聞きながらも、時宜を捉えて、彼が事故以前に関心のあった登山家を引き合いに出し、登山家たちの前に立ちはだかる障害と男性の前に立ちはだかる障害を重ね合わせ、「登ろうと挑むことができる」と介入している。それを機に男性が回復に向かったとのことであるが、ロゴセラピーの介入について知ると、そこに通底しているのは、ロゴセラピストが、どんな苦悩のなかにある人間であっ

ても、決して台無しにされていないものがあると確信していることのように思われた。その確信を真ん中に置きながら、たとえ変えることのできない苦しい状況であっても、それに対する向き合い方は自由に選択できることを示し、苦悩のなかにある者の視界を明るくしているようである。そんなロゴセラピストのありように、私は言いようのない力強さを感じた。「魂の友」がそうであったように。

本書には、ふんだんに Frankl の言葉が引用されている。それらの散りばめられた言葉を眺めるとき、その延長線上に「人間に問いを投げかけているのは、人生そのもののなのだ。人間は問う者ではなくむしろ人生から問われている者であり、人生に答え、人生に責任を担う者である」（pp.162-163）というメッセージに辿り着く。「人生からの問い」について考えたい人にお勧めしたい一冊である。

- 原書：Elisabeth Lukas (2014) Lehrbuch der Logotherapie : Menschenbild und Methoden. Profil Verlag.